A13
4440
1

A13
4448
1

濱松歌國著

キノ二

全傳 駿河舞

一峰齋馬圓画

全部六冊

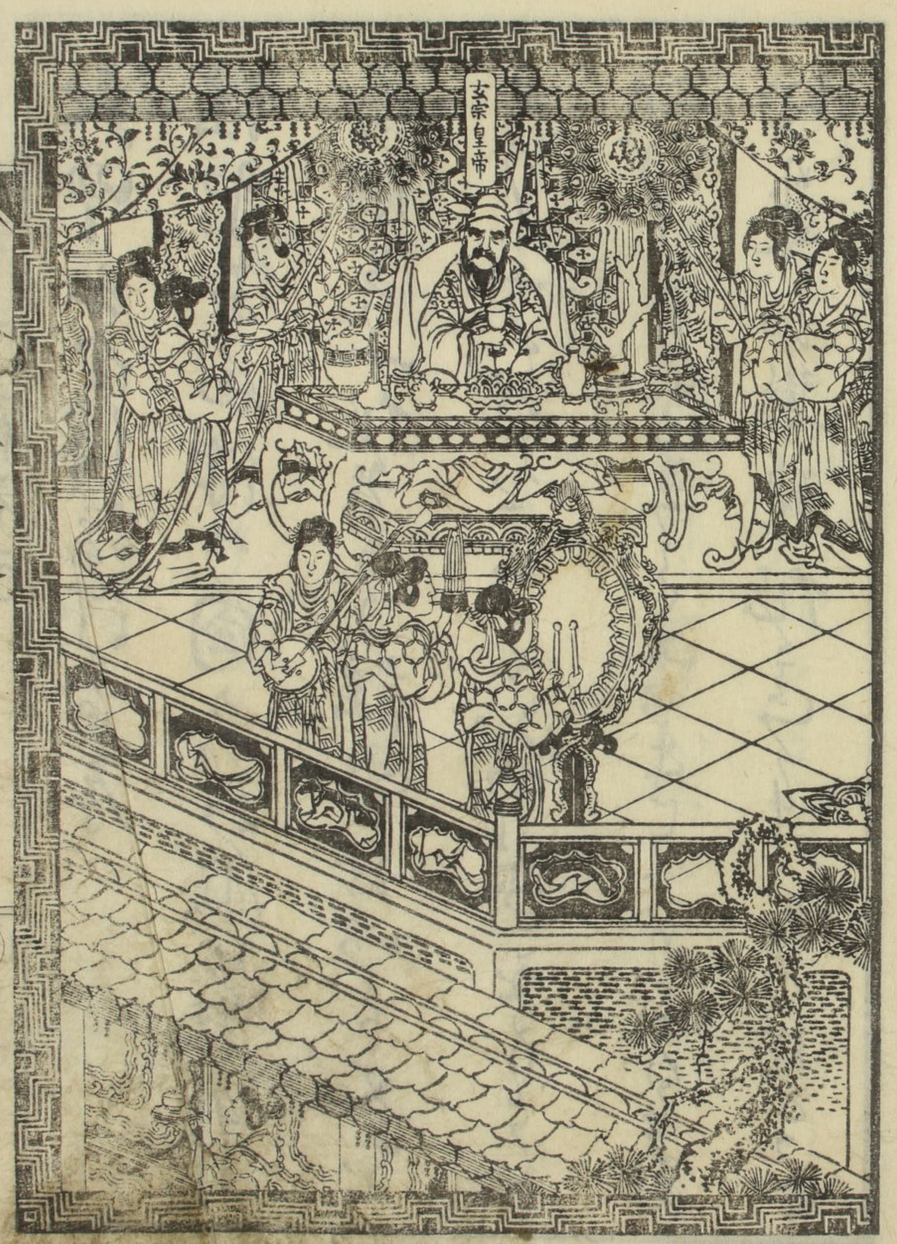
鼓動地來驚破霓裳羽衣曲

九重城闕煙塵生千乘萬騎西南行

翠華西出都門百餘里六軍不發無奈何

宛轉蛾眉馬前死花鈿委地無人收

河陽樓藏書


玄宗皇帝

貴妃驪山宮ニ
夜遊の曲ば奏
ずる図
太真

紀貫之全傳序

淫中華西津の国の難波に衛門

督の国司に任者あり謡曲なれば文を

たゝ古詞を書くに我書をもとめ

新しきを書くに古きしるとる意

世是詞戯作に任ずるあるべき

国司淫曲乃任文を實を書て

戯場の類同也 貫之の作を

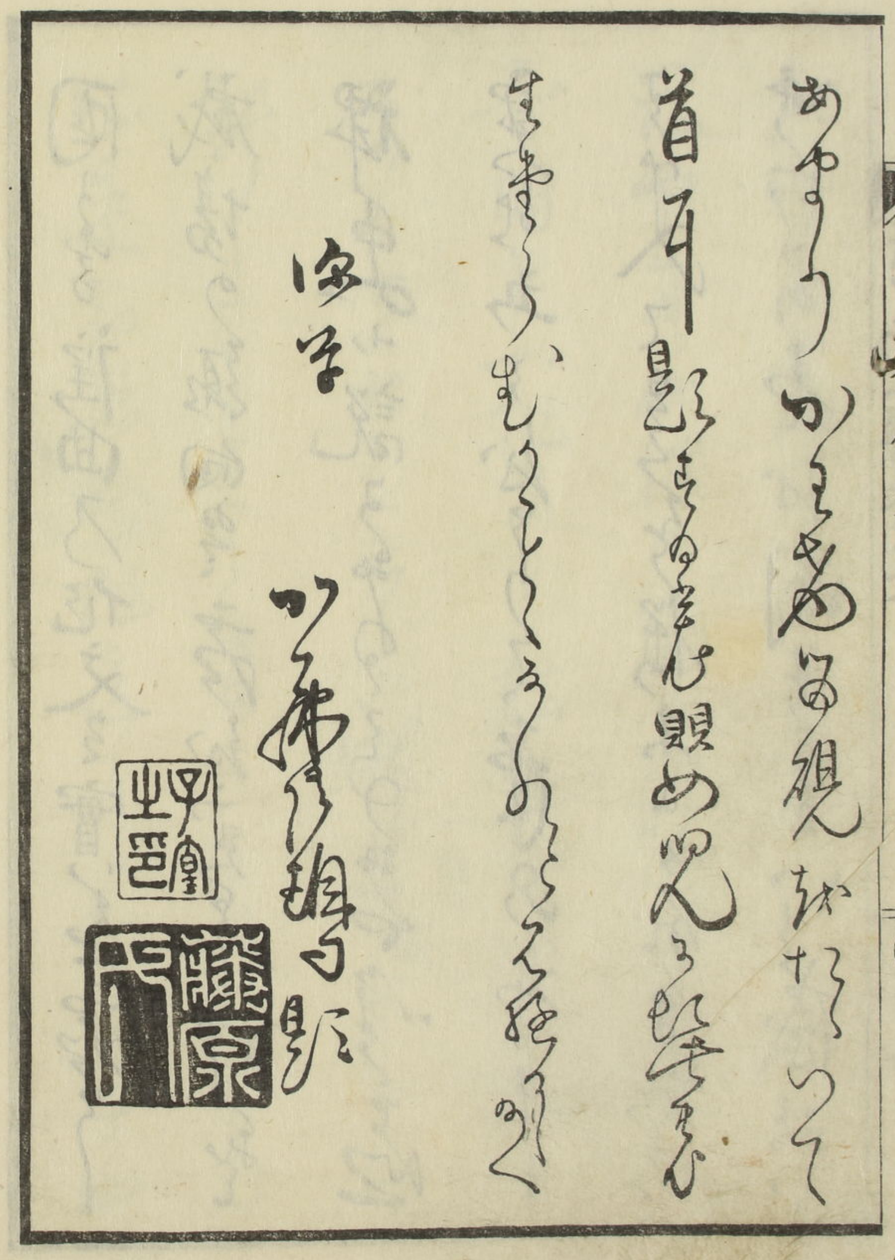
裸男小説なるものや浮世

実録五ゝなりて筆の無

ゝ人て見ゝを桜木ゝ成ゝ陽

世ゝるの者なり閲ゝるの人ゝ歳祝の

漁夫伯寮
習光



霞雲太鼎
風早尤京之介

伯寮娘乙女

神楽良三八
三八女房仏木
組屋六郎左エ門

右近之介勝家
天津妃

傾城御空

赤松入道

北川宗左エ門

細川勝元
さてゝゝ
杜許

目録
一齣 室町の治乱
二齣 塾田の通夜
三齣 逢穂の月夜
四齣 羽衣の松樹
五齣 桑名の渡口

六齣
ほそ乃住居
七齣
伏多の
鶯黄
八齣
外面の竹林
九齣
西岸の
夏日
十齣
嵯峨野
白雪

十一齣
記念の
夫佛
十二齣
貞操乃
自殺
十三齣
恩愛の
節義
十四齣
手向の
名香
十五齣
大原の
冬枯

キノ二全傳 駿河舞卷之壹

編者 濱松歌國
畫工 一峰齋馬圓

一齣 室町の治乱

東路の清見潟。澄穂の松原。羽衣の松とて捐ひいでゝ一本の松樹あり。是をん往古天女。りまくごゝもて遊びゝ羽衣をこゝの玄ようけをきゝるを漁夫これを奪ひて返さゞる天津乙女を。五衰の苦しゝを拂ゝるゝひゝして終ゝ漁夫が妻女とゝうて。浦の苫家ゝ憂年月を送る。一日漁夫が他所の隙をうゞひ。羽衣を取て天上ゝ飛去ゝ。古書ゝも見へ

謡曲を作文て世人らく初まり。後河国鹿原郡治道神社
と。神名帳に記して天女弐柱祭る故実に彷彿一條の譚
話あり。元明天皇の時遣唐使藤原の宇合卿と俗
人福原掃部頭貞厚入唐して霓裳羽衣の曲を習ひ得
て。帰この秘曲といふを大唐の玄宗皇帝楊貴妃と共に驪山
宮において月の夜遊の曲なり。貞厚帰朝の后子孫に傳へ
て秘曲とす。後花園院の永享のころ福原貞澄の時にあ
らていさくの誤有て勅勘を蒙りて妻女を具して東
の方に流離ありて後行る三保ヶ崎に至る。此地を東
西一里余も海中に出る松原にして富士の名山に雲間

小見渡せば双の景地いたんかる。清見潟船漕出て三
保ヶ崎松の上ゆく月はらるうるかと詠る哥の風情もゆ
ゆしく。我勅勘の身となりて。彷徨
零に及べども。先祖貞厚入唐して傳来せし。霓裳羽衣の
秘曲の一巻は肌に添てもて此三保ヶ崎に古へ天津乙女の降
てあそびする佳境とやうぞ。爰に住居せんとおもふ。渾
家の冥路有理といふへしてやがて土人に拠て杖をとめ。
心ろざす蜑ヶ形端麗つぎきこる中に交りて爲魚をとる。
原来世にまれる立木にいつざきれいつしか海人の手業に見習て。
漁夫伯察と名のるごとも。此まくに朽果んも口惜しく。曾は先

祖への不孝を悔べ。若を再び帰洛る〜。福原の家を起さんとて。富士権現を祈願るすと〻ども。其ころハ世上さハが〜く。永享四年ゟハ大地震して諸国の人民ハ扶ど。或ハ彗星出あるハ天色紅を変ぜるゞど。七十三八十四の夏とも有のごとうず。嘉吉元年酉六月廿四日。播磨の白幡の城主赤松入道満祐が逆心ゟよりて足利六代京都室町の将軍義教を弑〜奉る洛中の騒動とゝう。上一人より下庶民ゟ〜る迄安き心もなりざるよう〜。貞治流行て今ハ中〜ゟ鄙の住居して都ゟ百倍物ゝとてぶつゟ内洛の事を思ひとゞまりて。三徳の浦辺ゟ住則るうちゟ。寿女実路も情治て玉のごとき女子を設〜うハ。名ハ乙女と呼で。父母の寵愛浅からぬ。十余年を過ぬ昔ゟ乙女破氏の去ハ迎ふ母の関路偶〻風の心地して却。俄地の客とゝう行〜うべ跡ゟ彼ゟ〜伯察も力ゝ。乙女を尚さう泪ゟ流すべうく野辺の送ゟ営て。茶毘の烟とゝうハ常ゟ見ハ〜富士の烟ゟ申ゝうりて扣ゝ。厳石ハ紅蓮と亡母の苦悩弔ゝんゝ。程遠〜ぬ巨鰲山清見寺ゟ詣で。赤を郊並の華を飾て茶を施〜るゞ〜て心〻ゝの仏ゟとゝう。此時を是文正の頃ゝり。二説嘉吉三年七月廿日足利七代義勝公早世ゟ〜て文安二年次男義政公ハ将軍職ゟ任ゞ〜

らば然故赤松満祐を攻んとて。播陽白懸の城へ大軍を向ハしめ。不日に赤松が一族菩縄。佐用上月小寺。他同党等を
とく〳〵討死に及ひ。入道満祐も。今ハ是まで叶ハじと自殺る
し。さ〳〵も要害堅固なる居城も。早に剛欲の馬蹄に蹂
ぬ。殿后廿余年を経て。應仁元年五月廿五日室町殿に爭論
あり。て管領細川勝元山名宗全両執權霍執に及ひ遠
近の大小名ともひく心くに助を合ひく。細川に組る方
ハ。山名に属すあり。宗全方の軍勢ハ。都の西に陣を取る。
勝元方ハ東に陣を張る（陣取の旧地）惜むへし。此時洛中の佛閣経藏記録古書ことく

（後世西陣と字で東ハ堀川西八千本を限りて一條より北に方内百五十丁こき山名が）

く兵火の爲に焼失す。斯て両家龍虎の勇を震ひて戦ひ。
年に山名宗全敗軍に及び。猶元ごくめを討死を遂られ。
四海騒に太平を訌ひ。室町家の武威日〳〵に衰ぬ。
関の開もう〳〵聖代の昔といふりぬ

編者曰此一齣〳〵〳〵。始元明帝（仁皇四十六代）の時。福原貞
雲。大唐より霓裳羽衣の秘曲を傳へて陣朝々〳〵。永享
の頃（仁皇廿代後花園）末葉向沈勅勘の影りて。こ保が浦に流
離。嘉吉の時赤松満祐。足利義教を弑し。應仁（仁皇百四代後）
陣序の大乱まで。永享より年数凡四十年が間の要を掲て。
末巻ことの大意を知る緒ともハ。再吟〳〵て此文段を会得ま

二齣　勢田の通夜

足利尊氏八代の正統源義政云へ天性花車風流を好まるゝの人先年の兵火に焼亡せし。唐山に我朝の書籍名器を惜ませらるゝ。諸国の秘蔵の珍物を求らるゝ。珊瑚珠の校球琳の混淆燕窩の安達貝。扶桑の瘿附子。郭茶。猴玉の彫ひいつゝ文く水精。犬精。玉珠の夜もてゝすうんど。清ぐてさとゆるゝ心のまゝうとゞ。此序癖きるろ以奥。あろい猿楽。茶道の美像を定めるふてゞ中に。米改云。弾さうもうをゝ。伶人福系の家につゝ。霓裳羽衣の秘曲を今絶る人をそう。福系の子孫いゞ成りんと云うく由也及びて。風早左京之助とゝるの心の裏

るゝふやう。室町殿舞曲を好ませらる。遠境に初めて近江をかきるゝもべ。霓裳羽衣の曲に妙なる人あゝ。足利家へ出べきを今よ。あて其沙汰をせず。年来舞曲に心をゝる存念を神仏ゝそるりをまう。此秘曲を傳授ゝもう。我風軽をゝ者きんまいを。の神に仏に捧ひて。ゝとの本懐を達し。青雲の朝にゝふべきとゝ。ゝに心をくゞくうゝ。誠や尾張国熱田郡熱田の神社を。天の村雲の叡を。今六堅ゝ。大宮八日本武尊東素盞烏尊南八宮美姫。西伊弉冊尊北八倉稲魂命。天照皇太神ゝ。玄宗皇帝と惑さんと異国に。楊玄琰が女ゝ。楊貴妃をゝ。玄琰が女ゝ。ゝ。妻の王の妃ゝ。后に玄宗に呼もて后妃と称ぜらる。玄宗と共に霓裳羽衣の舞曲となりぜ。楊貴妃が本躰ゝて。熱田の熱田明神ゝ。

室町の治乱

赤松方
赤松方
赤松方
赤松方

尾張の国に行て風願をこめんと。像を彩装して。都を立出
常日をゆゝずして。この宮居は英ぬ。実や此所とぞ。日本の
蓬莱宮とゝひ傳るも。ゆゑ有。富麗くゝして文は色
添りるく。荘厳嚴くゝしてさながら七宝をちりばめ。滝音
万里の粧ひ。長生殿山の光景も。是ぞいうで及ぶべきと
いふべきぬ。今宵此神前に夜なゝて。参籠して祈る
納受のまゝ丹誠を抽で。祈念する。暁のはるひぬ
ちとなく現まうく。神殿のうちに妙ちれ法華経
久堅の天の羽衣はるくきて三保の浦末の松に掛まる
と告のふうちに。夜はもうくと明ぬ。花京之助は。神詠をむ

三度吟〜返して。其心を判ずる。偖八幡河田三保のうちに
至るとぞ。竟者羽衣の秘曲を伝へし人なりと。神の存き
ふかゝんとぞ。そゞろに有がてくて。神おる叩首をる三
保のうちをさして。ゆきぬ。二説こそ霊重太郎と又
る強盗ありて。数多の支業に隠れ東海道に俳徊る。此
者の素性いんとゝれで。先年比り赤松入道満祐の子多
木名を四郎祐宗と呼しが。弱冠きは放蕩みして。父入道乃
擯斥ぜらる。播磨の国に住居叶まず。陸奥の果に行
よりいづるもの羽黒山に籠りて。山賊の元謀とゝなるうち。又満
祐義政ゲ為に討死とゆう。弟宗左ひ合戦して。

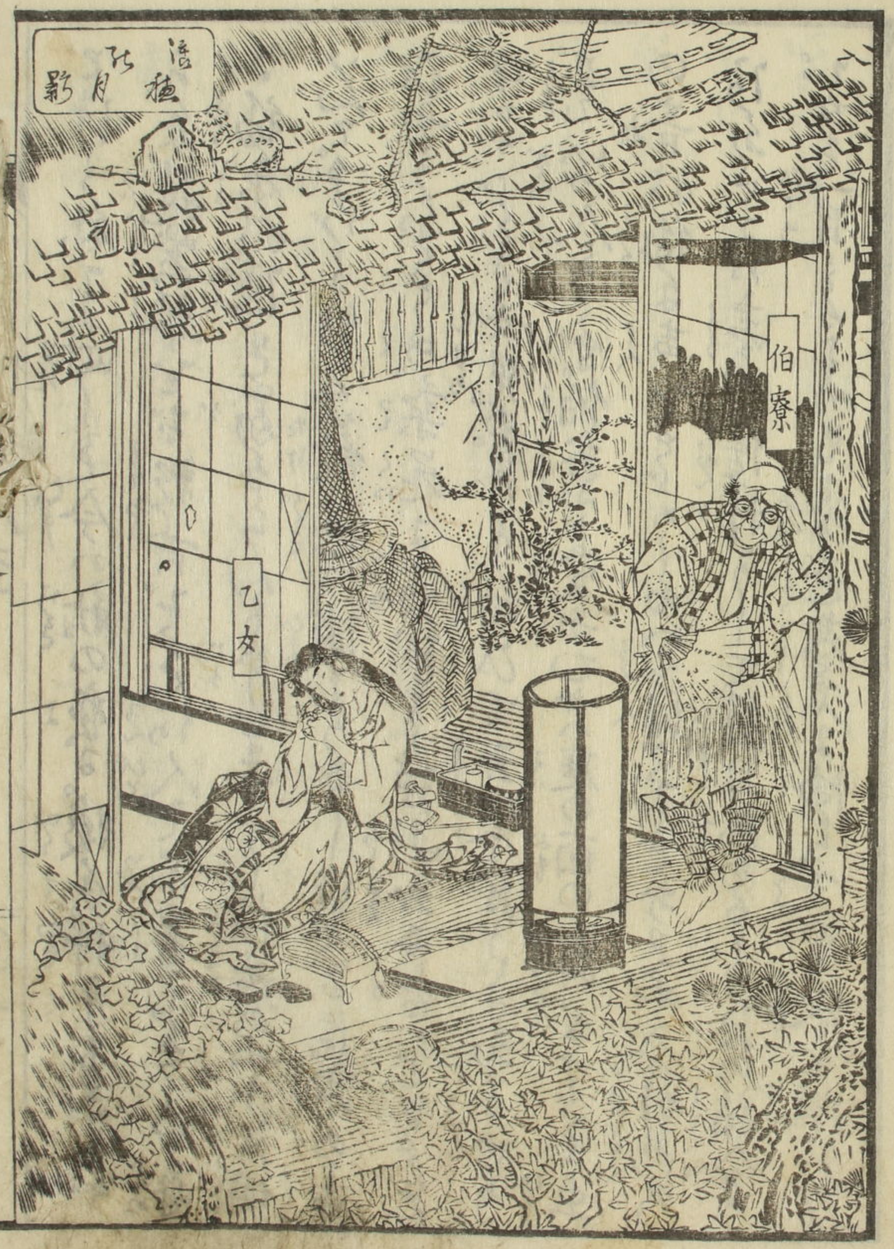
不孝を侵さ移させんと。此はて東はるを来て。旅人の行費を奪ひ。又も民家を忍び入て。專ら軍用金を八聚る。一日福雲太郎八。三保が浦にぞ。うて。伯察が未通女乙女が閨窟を。満人が名高を八恢ぎ。容貌のけてやうを。忽此魂を天外なるまで。是より只美乙女がるのを見ぞ。うつくしうて楽しまざる光景なれば。部下の者ども不審をひ賊を八伺ひ捕もうしき狗を八人面ほ心を叶ハざるをけりやと思ふ。太郎八夜刃のごとき面を和らげ。恥しき形容て。三保の浦を漁又が未通女を慰ぶ出。白波を佐うとうとぞ。紛下のうちうち。足柄の三郡として。この地のうどと。行はを委しく知きる男。すみおてい。やうと保がきの漁夫が如き。紙音の眼よりぐまるべきハ伯察ら未通女乙女よりて外に有まじ。彼が又八原皇初よりおのて。福京掃部の未業。を水西貞澄として。犬内の伶人うりしが。貞澄ものは為命ずして此地に来て。四十年来漁夫となって。名を伯察とふ。未通女を乙女と呼て。竈を造ずまるのを都なりうせで。水中の金をやうん。紙を八大中成統をて。軍法を掌握うとうとう。時。乙女が法を為中と定むるを。家とうひ客が。とつひのふをうけうべきぞ。我ら伯察ら。あへ。私を入て。乙女を奪ひ立ゆ。ん。何などの事ら。うんと。関ら。泳福雲八

又一般の戯びを憎むハ宵忍び入るを尾よして乙女を奪ひ
またハ宇津の山の嵐が薪の所に伴ひ行日頃の思ひを晴
さんと行下の手業ハ定る毫もなき術あり

三齣　浪穂の月影

月下老人ハ赤縄ハ足を繋て早く婦を成しめ之に
凪早左京之助ハ鞍田所作の者導をらけて浪路か植の庵
に集るゆゑを秋の日の入も早く太陽西に傾けバ此辺りに宿
つきおかぬ福泉負能が定縁が尋がやとやらの月皎くと
切りや兔息蟾精町をゆく白日のごとく照がゝる好景を愛
清く之穂が嫁にゆて清光を見るに森漫たる大海眼にも

ありて一面の鏡を布るに異ならず。海水天につらなって雲は飛ひ
うしろ浴も月まかりやきて巌を洗ふ富士の奇峰も只一眼に
見え渡して手にも取る如く思はる。月ハ猶おもふさかひのころハと
詠ぜし松島の風景。蜑の苫家を見廻して遥かなる浮
の境も見るまいかで勝るべきと知らずうかつて只楽しと
とひきち人里ある方にゆきて今よひの宿を借らんとて是ぞ
彼首を見やるに。燦と揺る珠に織る泉に行燈の灯の
風に見ゆるさ妙なる琴の調べの聞ゆるまで。心惹しと
さ京之助ハ時外面に佇て。儘や古への楽府に
一方二の弦ハ索くして緜のうぜ松が枕に陳韻落


清秋月影
伯寮
乙女

と詠じ給ひし時しも今ハ秋の夜に。撥手。押手も志らや
らぬ身。筑紫琴をぞ引すさびて。行人ぞ不審しぞしや尋
る福原ハ。隔も遠からんも千里がへし。住居の窓に徊
りんで。ほのぐらく見る竹籬の隙よりさしのぞきは。窓の庭や
びやのかすかなる。梨花に露をふくみ緑の玉に香をうばふ魂
ならぬ。ごとき女児の月に向ひて玉琴を弾きさしたる。せわ
しき人かはらず。伯寮が愛子乙女ハ庭の面の千草にすだく虫
の音は。恋る声をもよぶしめんとあはれやる。竹籬の
ひまより窺ひ経にして眉目画るごとき其の美人あり
乙女を一目見るよりも。喜色想力に満ち下ゆく水を堰り

心の積なるひとつき。月の名高の夜目を同じく八つひよがら。甚だ不可
もつれしね義男なれぞ。魂ちりぢりにまよひて。彼の路傍の人のごとく
只おもひ焦もまろぶのを。花京も乙女が風姿を見て。満たくとして
一條の春路に迷ふといへども何とぞひとえ便りなく。ぬかり
縁の不足そのうらみ。偶も心や氷輪の外とありし夜ころ
偉なるもと研行おもひて。膝前の行方の扇面に
女感陽氣春思男　男感陰氣秋思女
彩く故人の詩七言の二句を書て乙女が傍へ投込ハ。壁の端て割
刺して此畔の箸に丈の伯寮が納戸の辺に目だやくも。落て見
顔とはもとよりすぐて数回吟じくし。外面なる婦人の

勅諚女児の容色佳麗なるを見て、おのれ、ものうつさせ、寵愛あり。五
尤京よりむかし此ならはしを見聞ざる。仁兄八嫌人ましますよる。
彩雲たなびき霧深くもかすみ。見苦しき蛮ばかりを共に夜伽
のつとめをさせ給へとて、父が親の旅人より女児に女が雅踊ハ天にも昇
る心地せり。尤京も節分を合ぐべきさとひを強いと抑
隠し小子八都の者にて。當年を不知業肉をまぬかれ
て彩の仕合ものを一宿抱き入れ。礼述て肉を入きハ。乙女ハ
庭の井戸の水のうさぎと心を抱き。嘲るように持ち
て。草鞋の紐を結びあり。伺察て乙女と共に。狗の魚を
焚栗を炊き。酒をすすめて。いと念頃に客を慰うた。

八四辺を見ませハ中有氣ある風情にて。懸屏ハ畫幅数
多採ちて。座右に貼る。彼方ハ風韻なる。等閑の述
懐をあらハす。是主人の作業なるや。小子も幼なより。物ひく事を
嗜んで。筆法をもならはす。為又ものの山水を画
枝葉ありて。某も又花鳥水石大方ハ写しも侍るが。主人
書ハ幼ふして。筆の端を稽さんとて。墨をとりて画かれ
伺察て。氣韻頗天然の筆法なり。画名も京を皇都
の青みて。先祖を猶京掃部以貞とつゝ代々嘗曲の
道ハ学びて。あまを水正貞流と。ほし去ならしう。さるふ
子細ありて。ハを立退。此三保ヶ崎ハ漁夫と成て

郎清猛しさ才とを兼ねて。扨俗らう左京之助。満面
に笑ひを含み。教導ふ熟田明神の灼然なる威徳に。
心のうちは遠ねぬ。伯養まむしい礼儀正しく。偖
福原貞厚どの。未葉の水正貞流どのまでもんくや。
小子うは。風早左京之助として。年来茶曲の道に心を寄
せ。此度足利の武将義政公花車風流に好こゝろ。
癖もなく無て都まは靖乗男んは紛うて。そゞ中は
殊さら茶曲ふかう。覚悟羽衣の曲に今初る人稀な
と情こ。先年勅勘の為ふたる。福原貞澄う紛れ暴
ひのふこ。小子かのうは影う。第至仁兄の在家に尋ふ

ん。熟田明神へ糸竹を立て祈らう。祈る
情合あつく。なほ来るる尾張。左ぐるは結ぶ八伯京
も。茶の道のうひを知ぬ。身う茶を楽んだ。
手ゐ人数尋ふ。使は宿を祈ん。
ひつく立て納戸ゐる。服部家ふる。
秘曲の。茶。茶布を持ず。勉ふ乙女う弾指。その
面を。もとを。見て。福原掃部貞厚仁
四十三代元明天皇の御宇。遣唐使藤原宇合。
入唐して。ふい。天唐の玄宗皇帝。楊貴妃
の。月の夜遊の。ねむの曲。弾ふ。

新古秘口傳ぞくてく伺糸ち。箱糸の奇の
再奥ゑ。ゆくるよのくまんくすと。嫌の後の巻きのごくり
ゑ。月半天ゑ蔵ゑくり。

キノ二全傳後河葉巻の一畢